

巻 頭 言

学部長就任にあたって

理学部長 朽 津 耕 三

はからずも理学部長に就任しました。有馬前学部長が総長特別補佐に就任されましたことに伴って、急にショートリリーフとして登板した形ですので、ウォームアップも十分でなく、戸惑うことばかりで毎日を過ごしています。しかし、有馬先生と藤田・宮沢両評議員からアドバイスを頂きながら、少しずつ仕事に慣れて来ました。

理学部で行われている研究の対象には、時間的にも空間的にも文字どおり桁ちがいの多様性があり、研究の場所も世界の隅々にまで及んでいます。研究の方法論も、きわめて多岐にわたっています。しかし、40年に近い理学部での生活の中で私が痛感するのは、この多様性よりもむしろ、基礎自然科学の研究者の誰もが共通に持っているスピリットです。うまく表現できませんが、おそらく自然現象—その多様な個性と厳密な法則性—に対する愛着と好奇心が、研究領域を超えて理学部構成員を結びつけている絆ではないでしょうか。

20才台の前半は、理学の研究者にとって最も貴重な時期だといわれます。理学部在籍者の過半数はこの世代の諸君です。この世代の人々の創造的活動が最大限に行われ、理学部から優れた業績が最大限に生み出されるようにするには、どんな研究教育の場を築けばよいのか？ そのために私たちは何をすればよいのか？ “理学院構想”の原点はここにあると思います。

今年度は、私たちの長年の悲願であった理学院構想が、全学の動きの中で進展を期待できそうな機運にあります。また、今年度末に時限を迎える中間子科学実験施設の改組拡充計画、東京天文台の国立研究所への移行計画、臨海実験所の建物の改築計画をはじめ、理学部の前途にとって重要な多くの計画を強力に推進すべき時期でもあります。皆様の御協力と御注意を頂きながら、そして戸張前事務長に代わって着任された野島事務長はじめ事務部の方々とも力を合わせて、理学部発展のために私の持つ力のすべてを投入してゆきたいと願っております。